

名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科  
平成 25 年度 学位（論文博士）論文要旨

Graduate School of International Studies  
Nagoya University of Foreign Studies  
Thesis or Dissertation

学位論文題目 Title	言語的マイノリティ児童の学習言語（英語・継承語）を 育てるカナダの公立小学校の実態—エスニック・マイノ リティの活力、児童の心理的要因、バイリンガル作文力に 焦点をあてて Bilingual Education for Minority Language Children in Canadian Public Primary Schools: With a Focus on Sociological and Psychological Factors and Students' Chinese and English Writing Skills
氏名 Name	鈴木 崇夫 Takao, Suzuki
専攻分野 Field of Study	博士（日本語学・日本語教育学） Doctor of Philosophy in Japanese Linguistics/Pedagogy
学位授与の日付 Date	2013 年 12 月 18 日 December, 18, 2013
学位記番号 Diploma Number	乙第 4 号 No. Otsu-4
論文審査委員 Dissertation Committee	田中真理 教授 廣瀬正宜 教授 石田勢津子 教授 中島和子 名誉教授 トロント大学（カナダ） Professor Mari, Tanaka Professor Masayoshi, Hirose Professor Setsuko, Ishida Professor emeritus Kazuko, Nakajima University of Toronto (CANADA)

【キーワード】

言語的マイノリティ児童生徒、公立学校教育、継承語イマージョンプログラム、学習言語  
力獲得、コミュニティの活力

【Keywords】

linguistic minority students, public school system, immersion program for heritage  
language learning, acquisition of academic language proficiency, ethnolinguistic  
vitality

# 論文要旨

## 1. 研究の目的と意義

国境を越えた人の往来が容易になった現代、世界各国で言語的マイノリティ児童（移民児童生徒、日本では外国人児童生徒）のことばと学力の習得が問題となっている。子どもが母語を失うと親子のコミュニケーションができなくなり、アイデンティティが揺れ、学力不振につながって、学校を中退してしまうというような事態が起こる。本研究の目的は、このような状況にどのように対処することができるか、言語的マイノリティ児童生徒教育のあり方をカナダの先駆的な取り組みを通して追究することである。言語的マイノリティ児童の言語習得分野を担う継承語教育研究は、これまで週末のみ授業を行う週末継承語学校や放課後プログラムの児童など学校の課外で継承語を学ぶ児童を主な対象にしてきた。しかし、バイリンガル教育の諸研究の知見から考えれば、継承語を学習言語として育てるためには接触時間や接触の質を高めるという点において課外学習だけでは不十分である。そこで本論は継承語教育研究の未到の領域である、小学校正課で継承語を授業言語として半日間使用するイマージョンプログラム（公立学校正課型バイリンガルプログラム）を取り上げ、その実態を明らかにし、学習言語の獲得を可能にするより質の高い継承語教育を模索する。

公立小学校において言語的マイノリティ児童の母語を授業言語として教育するという取り組みは世界的に希少であり（Skutnabb-Kangus 1984, Corson 1999）、日本を含め世界のモデルとなり得るものである。また本研究は、子どもが持つ言語・文化を抹消させることなく、学校で育てて国の言語資源、人的資源にするための言語政策の指針とすることができ、教育的観点からは、子どもの学習成功、および子どもがルーツを失うことなく人間性をより豊かにするための教育実現に向けた1つの実証的研究になるものだといえる。学校教育全体を通して2言語を育てるという取り組みは、言語的マイノリティ児童のダブルリミテッド（母語、第二言語とも低迷）を阻止する方法でもあり（中島 2007）、さらには日本語教育、英語教育、バイリンガル教育に広く役立つものだといえよう。

## 2. 調査対象

本研究の対象校は、カナダ・アルバータ州エドモントン市公立学校教育委員会管轄の「国際語バイリンガルプログラム（International Bilingual Program）（公立学校正課型）」の中国語プログラム（Chinese Bilingual Program）を設置する小学校2校で、調査協力者は在籍児童（3年生36名、6年生34名の合計70名）、及び学校長・担任教員・教育委員会（カリキュラム担当者）、保護者、同族エスニック・コミュニティ団体理事などプログラムに関わる教育関係者である。エドモントン市の「国際語バイリンガルプログラム」には、ウクライナ語、ヘブライ語、ドイツ語、アラビア語、中国語、スペイン語があるが、中国語プログラムを選択した理由は、規模が最も大きく2000年以降も在籍者数が増加してい

ること、エスニック・コミュニティの活動が活発で継承語・継承文化の教育に熱意が確認できること、同様の形態の日本語プログラムが存在していないことの3点である。言語に加えて学力との関係を見るため、州統一テストの対象となる3年生と6年生を選んだ。また、言語能力を比較するため、対象校の英語レギュラープログラムの英語母語話者児童47名と台湾の中国語母語話者児童61名の作文サンプルを収集した。

### 3. 研究課題と方法

研究課題1は、言語的マイノリティ児童の母語を授業言語として教育するユニークな形態である「国際語バイリンガルプログラム（公立学校正課型）[英語／中国語]」を取り上げ、その実態について Landry and Allard（1991, 1992）の巨視的バイリンガル育成モデルを参照して分析することである。以下の4つの課題で構成する。

課題(1) カナダ・エドモントン市（社会）における中国語系グループの活力はどのくらいであるか。また社会、家庭で児童はどのような言語接触を持っているか。

課題(2) 学校、保護者、エスニック・コミュニティは児童の二言語学習・習得に対しどのような姿勢で教育的サポートを行っているか。児童は二言語に対しどのような心的態度をとっているか。

課題(3) 3年生、6年生の中国語作文力、英語作文力、及び学力（教科学習の成果）は学年相応レベルに到達しているか。そして二言語の関係はどのようになっているか。

課題(4) 児童の二言語に対する心的態度と二言語作文力はどのように関係しているか。また二言語作文力と学力はどのように関係しているか。

研究課題2は、「国際語バイリンガルプログラム（公立学校正課型）」という継承語教育形態の利点と問題点は何かについて、研究課題1（実態調査の結果）を踏まえて考察することである。

最終的に研究課題1、2を踏まえ、カナダを含め世界が共通に抱える言語的マイノリティ児童生徒教育のあり方、とりわけ教科学習言語の育成の観点から教育的提言を行う。

分析の方法は、対象児童に対し、言語環境について13項目からなる紙面の言語背景調査、及び現地語と継承語の Ethnolinguistic Vitality [以下、EV]（民族グループの活力）に対する心的態度について5件法による質問紙を用いた。また、言語能力を作文テストで測定し、学力については州統一テストの結果を用いた。児童を取り巻く社会環境や教育的サポートについての分析は、カナダ統計局の人口動態データに加え、教育関係者にインタビュー調査を行った。

### 4. 結果と考察

研究課題1はプログラムの評価であるが、まず中国系カナダ人のEVが非常に高く、人的、政治的、経済的、文化的に強い活力を持つグループとして現地社会に入り込んでいることがわかった。児童の言語接触は、8割以上がカナダ生まれの子どもであるものの、ほとんどの家庭で中国語使用がある。また多くの児童がエスニック・コミュニティのイベン

トなどで小学生でありながら学外の友達と交流する機会を持ち、家庭・学校・社会においてバイリンガル環境で過ごしている。教育的サポートについては、「教育委員会（行政）、学校、エスニック・コミュニティ」の三位一体の運営体制により、児童の現地語、継承語を通じた学習、文化理解の促進に最大限の支援が行われている。継承語の価値づけは特に強化されており、エスニック・コミュニティは地域社会を巻き込む多様な文化活動を提供し、教育委員会はカリキュラムを CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）に準拠させるなど、児童の継承語力が国際的評価に繋がる取り組みを行っている。このような支援下で、児童の中国語と英語に対する心的態度が異なる構造を持つことがわかり、中国語はルーツの理解に繋がるものと意識される一方で、英語は必要性や有用性が強く認識されていることが示唆された。

英中作文力については、対象児と母語話者児童とを比較すると、英語作文力においては 3 年生、6 年生ともに統計的に有意差は見受けられなかった。しかし、質的観点別に見ると Satisfactory（標準）に届かず Limited（やや不十分）と評価されている児童が多かった。一方、中国語作文力は両学年ともバイリンガル児童の作文力が有意に低い結果となっている。つまり、どちらの言語もまだ限定的な力であり、モノリンガルで教育を受けている児童と比べると、小学校の 6 年間だけでは高度な作文力を習得するには時間不足だと考えられる。バイリンガル児童の両言語の関係を観点別に分析すると、思考に関わる言語活動である「内容の豊富さ」、「全体構成」に高い相関があり、Cummins（1984）の二言語相互依存説を支持する結果が得られた。

学力については、英語（Language Arts [以下、LA]）は州平均に比べやや低位傾向が見られるが、算数・理科・社会は州平均より高位傾向にある。児童は半日中国語（継承語）で学習しても州の平均的な児童と比べて遜色がないと考えることができる。英語、中国語の心的態度と英中作文力の関係については、6 年生の「中国語：民族的誇りと付加価値」因子と中国語作文力にのみ有意の相関が見られ、中国語学習に民族的な誇りと付加価値を見出している児童ほど中国語の作文力が高い傾向にある。また、英中作文力と学力との関係では、3 年生において中国語作文力と英語（LA）で有意の相関があり、中国語作文力が高い児童ほど英語（LA）で高得点をとる傾向があるものといえる。しかし 6 年生では、中国語作文力と学力に関係が見られなくなり、英語作文力と学力に高い有意相関が見られることから、6 年生の学力テストでは英語力が要になっているとみなすことができる。州統一テストが英語でしか実施されていないことを考えると、現実的な結果だといえる。

研究課題 2 は「公立学校正課型バイリンガルプログラム」という教育形態の利点と問題点の考察であるが、利点は民族ルーツを育てることに成功しているということ、またカリキュラムをこなしていく上で学力に大きな問題が見られないことである。問題点は、英語・中国語とも言語能力が伸び悩むということである。

## 5. 結論と言語的マイノリティ児童教育への提言

本プログラムのようにエスニック・コミュニティに活力があり、一定の児童が集まるよ

うな地域では、「教育行政・学校・コミュニティ」の三位一体で言語的マイノリティ児童生徒教育を長期的に行う言語政策、教育政策が考えられるべきである。ただし、言語能力に伸び悩みが見られるため、教科の科目と使用言語の再検討など、今後はいかに教科学習言語力を高められるか模索する必要がある。また、言語的マイノリティの子どもが学習言語を獲得するには多大な時間がかかり、小学校 6 年間半日ずつ接触していてもまだ十分だとはいえない。限られた時間を有効に活用するためにも、Cummins (2009) が提唱するような二言語間の転移を促進する教育アプローチが検討されるべきである。エスニックルーツを持つ子どもが学校に持ち込む言語文化を適切な時期に長期的に支援することによって、彼らの母語を維持・伸張して公教育の中で育てることは、国の言語資源開発、人的資源開発につながるものだといえる。

言語的マイノリティ児童の現地語習得においても、自分のルーツの理解が一定の役割を果たすため、日本の学校教育で外国人児童生徒の日本語力を高度に伸ばすためには、帰属意識が揺らがないよう日本語教育のみならず、継承語の教育的手当てを行う必要があろう。外国人児童生徒教育の課題は、エドモントン型のように、学校教育全体を通してことばを学ぶ環境の整備をすることだといえる。

## 6. 今後の課題

本研究は小学校の 2 学年のみしか扱うことができなかった。プログラムの教育的成果が最も現れる中高生の実態についての実証的な研究を行う必要がある。また、授業観察を行うことができなかったことから、教師の指導の中身についての詳細を把握することができなかった。児童の限定的な言語能力の原因を究明するためにも、授業観察とその分析は残された課題といえる。さらに、本研究は言語能力の測定において作文のみを扱ったが、プログラムの実態をより多面的に分析するためには会話力や読解力の調査も必要であろう。

# **Abstract**

## **Introduction**

In recent years, issues concerning the language acquisition and academic success of linguistic minority children in school have been increasing all over the world. Such children face identity instability and learning disabilities caused by losing their first language. The purpose of this study is to investigate how schools can help linguistic minority students to improve in both their heritage language and the local language, and to be academically successful. Previous studies showed that learning the heritage language in a community-based weekend heritage school is insufficient for students to enhance their heritage language skills.

In this study, bilingual programs in public elementary schools are investigated to explore better ways to conduct heritage language education. In Canada, there is a unique bilingual education program for linguistic minority children—an exceptional approach wherein a heritage language is used in public education under the provincial policy in cooperation with the ethnic community. The program aims to develop literacy in two languages through partial immersion in the heritage language and the local language. This program may be a model of education for linguistic minority children in public schools. Also, the program supports students' acquisition of both languages thereby avoiding making them double-limited bilinguals.

## **Research Aims**

(1) To investigate macro factors and components of the bilingual program for linguistic minority children in Canadian public schools through the framework of the macroscopic model of the determinants of additive bilingualism and subtractive bilingualism (Landry and Allard 1991, 1992).

(2) To analyze the benefits and problems of the bilingual program in public education based on the results of (1).

Eventually, this study is to provide implications for heritage language education by shedding light on ways to encourage the development of students' academic language proficiency.

## **Participants and Method**

Seventy elementary school students (36 third-grade students and 34 sixth-grade students) in the bilingual program are participated in this study. Principals, teachers, the program staff, the students' parents, and representatives of their ethnic community participated as well.

The students were given a background information sheet that collected information on the details of their language environment outside of school and their educational history, and a questionnaire for analyzing psychological factors related to their heritage language and the local language. To measure the students' outcomes and type of bilingualism, writing tests were administered in both languages, and the results of provincial achievement tests were considered.

Sociological factors and educational support were examined using statistical data on Canada and interview data from educators and community representatives.

A Chinese bilingual program was selected as the focus of this study, because its enrollment numbers are increasing, and the ethnic Chinese community is very active and supportive of bilingual education, whereas there is no comparable Japanese program. In addition, provincial achievement tests are given in third and sixth grade in Alberta; therefore, students in these grades were chosen to participate in this study.

To facilitate a comparison of the bilingual participants' language proficiency and that of monolingual students, 47 English writing samples from the English regular program at the same schools as the bilingual program and 61 Chinese writing samples from students at a public elementary school in Taiwan were analyzed.

## **Results and Discussion**

To achieve research aim (1), program evaluation was conducted.

First of all, it is clarified that Chinese groups in Edmonton have strong ethnolinguistic vitality. That is, the Chinese community is geographically politically, economically, and culturally strong in the local society.

Second, the students responses on the background information sheet showed that 80% of students who are heritage learners of Chinese are Canadian-born, but almost all the students have opportunities to use Chinese at home. In addition, the students have many opportunities to communicate with friends outside of school in both English and Chinese at cultural events run by the Chinese community. In short, even though the students are young, their environment forces them to use both English and Chinese. Regarding educational support, it is clarified that the combination of three systems (i.e., the board of education, school, and the Chinese community) are extremely important for students' success in school learning. Under these systems of educational support, it is indicated that students have different psychological structures in English and Chinese. Chinese is related with their ethnic identity and roots, while English is related with present necessity and future usability.

Third, according to the analyses of students' bilingual writing in third and sixth grade, their English proficiency did not differ significantly in comparison with that of monolingual English-speaking students. However, students in both grades had significantly lower Chinese proficiency than monolingual Chinese-speaking students. In terms of provincial achievement tests, the bilingual students made considerable efforts in English language arts, and their scores were only slightly lower than the provincial average. However, their scores in the other subjects were higher than the provincial average.

To achieve research aim (2) the benefits and problems of the bilingual program in public education are argued.

The investigation reveals that the bilingual program has succeeded in supporting students' ethnic roots in public education. In addition, it is not harmful for students to achieve their academic goals for each grade by learning subjects in two languages.

On the other hand, it is clarified that students' academic language proficiency in both English and Chinese, in particular Chinese, is difficult to develop even though the students spend half the day studying subjects in the target languages and receive strong support from their school and ethnic community.

### **Conclusion and Implications**

Overall, the findings indicate that the bilingual program contributes to minority children's ability to learn academic subjects through their heritage language and English. In addition, the support of ethnic communities and their participation in the running the bilingual program appears to be fundamentally important to the bilingual schooling of linguistic minority children. This study suggests that language and education policy that uses a combination of three systems—the board of education, school, and the ethnic community—to support linguistic minority students should be implemented to assist in developing the country's language and human resources.

Understanding their own roots including their heritage language and culture, plays a role in linguistic minority students' acquisition of the local language. Therefore, supporting students' heritage language and culture in school is important. In Japanese elementary schools, although linguistic minority students tend to take only Japanese learning support, educators should also support their continued learning of their heritage language.

This study concludes that schools should provide linguistic minority students an environment for learning both languages in all activities of the students' school life.

### **Further Research**

This study targeted only two elementary schools. However, to explore the outcomes of the bilingual program more fully, research needs to examine the performance of students in higher grades, especially junior high and high school students. Also, this study did not include classroom observations; therefore, the details of the program's pedagogy are unclear. To improve students' limited language proficiency, classroom observation is necessary. Finally, writing was the only measure of students' language proficiency used in this study, but to examine the bilingual program further, various other areas, such as speaking, listening, and reading, should also be analyzed.